花火大会あるいはローゼナオ亭のある日曜日

第一幕

（舞台は午後の日射しの中の、英国庭園のある一郭の情景。リースル・カールシュタットは子守の女中。鮮やかな花柄プリントの明るい色の夏服を着ている。大きな車輪――前の二つが後ろの二つより大きい――のついた古風な乳母車を押している。その中の赤ん坊は大きなセルロイド製の人形である。

カール・ファレンティンは日曜日の晴れ着姿の重騎兵。

ＫＶ（黙ったまま舞台を上手から下手へと歩いていく。十秒ほど、舞台裏にとどまり、それから今来た道を引き返す。そこでまた何秒かとどまってから、今度は舞台の奥の半円形背景に沿って下手へと歩く。次に前方へ出てき、それから背景へと戻り、また向きを変え、まっすぐにプロンプターボックスへ行く。プロンプターに尋ねる）　ローゼナオ亭へはどう行くんでしょう？（また向きを変え、道しるべを見つけて、近づく。それを眺め、頭を振ると、下手へと退場。舞台裏で、もう一度尋ねる）ローゼナオ亭へはどう行くんでしょう？

通行人　あちらへ、ずっとまっすぐです。

ＫＶ　私、そっちから来たんですけど。

通行人　でも、あちらですよ。

ＫＶ　そうですか。（再び、舞台上へ出、そのまん中の道しるべのところで立ち止まる）矢印はこうなってるのにな。（上手に去る――が、すぐに戻ってきて叫ぶ）小川があるぞ、向こうへは行けない。

通行人（向こう側から）　小川には橋がありますよ、それを渡るんです。

ＫＶ　そうか！（向きを変え、また上手に去る。舞台裏で）あのう、お嬢さん、ローゼナオ亭へはどう行くんでしょう？

ＬＫ（舞台裏で）　ローゼナオ亭は向こうへ行くんですよ。

ＫＶ（舞台裏で）　でも、向こうで、ローゼナオ亭はこっちだと聞いたんですが。

ＬＫ（乳母車を後ろに引っぱって登場する）　あちらへ、ずっとまっすぐいらっしゃれば、そのまま着きます。

KV（再び登場する）　でもね、こっちの川を渡りなさいと、言われたんです。

LK　ええ、その通りです。川はこちら側です。

KV　で、橋は？

LK　橋はあちら側です。

KV　川はこちらで、橋はあちらなんて、そんなのありませんよ。

LK　そうですね、私もちょっと変だと思います。

KV　馬鹿げてますよ。

LK　あの、川はあちら側にもあるんですよ。

KV　じゃあ、川は二本あるんですな。

LK　いえ、あちらの川とこちらの川は同じ川だと思いますけど。

KV　同時にあっちにもこっちにもあるなんてことないでしょう。

LK　さあ、どうかしら。あちこち蛇行してるのかもしれません。

KV　そうですね、川は蛇行が好きだから。

LK　その通りですわ――あなたはローゼナオ亭にいらっしゃりたいのでしょう？

KV　はい。

LK　そしたら、あちらですよ。こっちへ来たら決してローゼナオ亭には着きません。どんどん遠ざかってしまう。

KV　その通りですな。

LK　ほら、案内板があります。

KV　誰も道を知らないって訳だ。

LK　道くらい知ってるでしょう――あなたはひょっとして、花火大会にいらっしゃるのかしら。すばらしいんですってね。

KV　僕はまだ見たことないんです。

LK　それなら、こっちを通った方がいいわ、その方がわかりやすいわ。

KV　僕にはわかりにくい。

LK　ええ、あなたはいらしたことがないから――私はもう何度も行ったから、道をよく知ってるんです。でも、きょうは行けないの、この子がいっしょなんですもの。――でも、あなた、道は簡単にわかりますよ。どんな小さい子

に聞いたってすぐに教えてくれますわ。

KV　でも小さい子が通らなかったら？

LK　そしたらきっと大きい子が通るわ――それじゃあ、まず小川のところまでずっとまっすぐ行くんです、それから橋を渡って――すると枝のたくさんついた木があります。そこで左の小道に入ります――そしてまっすぐシュライスハイマー通りまで出ます。そうしないと迷ってしまいますよ。

KV　ありがとう、どうも。（敬礼する）

LK　ずっとまっすぐ、それから左へ、それから、花が咲いててこないだの日曜に蝶が飛んでいた原っぱを突っきるんですよ。

KV　きっとわかります。（退場する）

LK　それから、野原の先、すぐのところに「ローゼナオ亭」という大きな看板があります。もしわからなくなったら、誰かに聞いて下さい。もし誰も通らなかったら、戻ってきてもう一度、私に聞いて下さい――もうあの人、聞こえないわね。（ベンチへ近づきながら赤ん坊に話しかける）ほら、坊や、聞こえたでしょ、兵隊さんは花火を見にローゼナオ亭に行ったわ。花火――正式には煙火術的行為というのよ。――ねえ、お前がもう大きくて兵隊さんだったら、そしたら私たちも花火大会に行けたのにねえ――でもお前は兵隊さんじゃない――ただのばっちい子よ。またおむつをぬらしたのね。手を焼かせてくれるわね。（赤ん坊の頭をぶつ）ごめんね――あんたには腹の立つことばかりだけれど。お前、見なかった？　何てたくましい兵隊さんだったかしら。私をきっと誘いたかったのよ。でもお前がいっしょじゃどこにも行けないもの。お前がいなかったら、何人の兵隊さんとお友達になってたかしら。あんたのせいでいつも日曜が台無しだわ――あんたは私の恋愛の邪魔なのよ――さあ、お眠り、私を困らせないのよ。（ベンチに腰掛け、編物をする）あの人、もうローゼナオ亭に着いたでしょうね――そうよ、そんなに馬鹿じゃないわ――私、本当にわかりやすく道を教えたもの――感じのいい人だった――私の好みのタイプだった――そのうえ重騎兵でしょ――重騎兵っていろんな兵隊の中で一番格好良い兵隊さんよね――砲兵も好きだし、それに戦闘機乗りはいなせだわ、私、一人知っていた――それから儀仗兵は美しい――でも誠実な人は一人もいなかった――一度か二度デートすると、それでおしまい。私は結婚したいのよ――重騎兵の旦

那様ってすてきでしょうね。そうだ、あの歌、何ていうんだっけ――かわいい、僕の恋人よ、遠くに旅する訳じゃない、バラの園で待っててておくれ、緑の牧場で、ああ、白い雪の中で……白い雪ってのは馬鹿げているわ、まるで黒い雪があるみたい。（KVが戻ってくる）あそこに来るの、誰かしら？　もう、ローゼナオ亭からお帰りですの？

KV　君、蝶のことですっかり僕をだましましたね。目を皿にして探したけど――蝶々が飛んでるのは見えなかった。

LK　何て良い方かしら。あなたとお話するの、楽しいわ。私が蝶を見たのは、こないだの日曜よ。あなたのために一週間も同じ場所を飛んでいるとお思い？　それじゃあ、道がわからなかったんですね？

KV　ええ、ちっとも。

LK　花火大会にいらっしゃるんでしたわよね――それならまだ時間があるわ――夜になってからだもの――明るいうちには花火はやらないから。そんなに急いで行くことないわ――十分で着くわ、だからちょっとこのベンチにお掛けになりません？

KV　よろしければ。（腰を下ろすが、すぐにベンチの後ろへ滑り落ちてしまう）

LK　よろしい、どころではありませんわ。ちょっとおしゃべりできたら嬉しいわ。

KV（座りなおして）　この乳母車、お安くなかったんでしょうな。

LK　ええ、まあ――あのう、重騎兵でいらっしゃるの？

KV　はい、重っていうよりは騎兵なんですけどね。

LK　あなたって良い方、お話してると本当に楽しいわ。頼もしい兵隊さんだわ。

KV　まあまあですよ――我が祖国よ、安んじてあれ、少なくとも、我ある限りは。

LK　もう軍隊には長いんですの？

KV　二年です。今はある少佐の従卒をしてます。軽率な奴でも従卒になったら、従卒だってのはおかしいですよね。

LK　その方は奥様がおありなの？　少佐さんは。

KV　もちろんです。

LK　どんな方？

KV　ひどい……

LK　どんなお顔？

KV　まずい……

LK　年配の方？　それともお若い方なのかしら？

KV　ちびで、でぶで――まるで丸太だ。あの女を知りませんか？

LK　いいえ、幸いにも――ことによるとお見かけしたことはあるのかもしれませんけど。

KV　先日、昼食のテーブルに着いていた時のことなんですけど、というのも、少佐のとこには昼食用のテーブルがあるからなんですが、といっても夕食もその昼食のテーブルに載せるんですがね、つまり、別に夕食のテーブルを買っても仕方ありませんからね、ナイトテーブルならありますけどね。きのうはお昼にコケモモと豚の焼き肉が出ました。その豚の焼き肉は家の台所で調理したものですよ。つまり豚の焼き肉の調理用に台所があるんですよ、といってもそこでは豚の焼き肉だけしか調理できないとお考えにはならないで下さい。食べるものは全部、そこで作ります。

LK　本当に、全部？　パンも？

KV　いや、全部と言ったのはまちがいでした。パンなどはパン屋で買います。うちの少佐はひどい始末屋でしてね、食後にいつも楊子を使うんですが、使った楊子は捨てるとお思いでしょう？　それがちがうんですよ。集めとくんです。そしてそれが三、四百本たまると僕に指物師のとこへ削りに持って行かせるんです。

LK　あなたって良い方。私を笑わせようとしてそんなお話なさるんでしょう。

KV　何をおっしゃるんですか、本当のことですよ。少佐のうちには子供が二人いるんですよ、二歳の女の子と三歳の男の子。三歳の男の子は二歳の女の子より今だいたい一歳年上です。この子供たちとは僕は仲がいいんですがね、あそこの動物どもには手を焼いています。少佐のうちには三種類の家畜がいるんです。一つ目は家の戸口の蝶番で、二つ目はセントバーナード、それからア

マガエルです。あとの二匹は昼にいつも一つの皿で食うんです。片方がもう一方の食うのをうらやましそうに見てるんです。セントバーナードが足を口にくわえててもアマガエルは分けてやらないのです。そして、片方がもう一方から皿を奪おうとし、そうやって部屋中を互いに引っ張り合うんです。たいていはセントバーナードが勝ちます。何といってもずっと大きいし強いですからね。二、三日前に僕はどっちがけんかを吹っかけるのか気がつきました。アマガエルだったんです！――だから、アマガエルを翌日青黒くなるほどこらしめてやりました。実際は黒くはならず、青くなっただけですがね。（赤ん坊が泣き出す）

LK　ああ、また始まった。坊や、すぐ行くわ。いつもこうなんですのよ。きっとまた、車の中いっぱいにおもらししちゃったんだわ。

KV　まだ満杯じゃない。

LK（赤ん坊と布団を引き出す。布団は途中で落ちる）　あら、ちょっと抱いてて下さいません？　まん中を持って下さいね。落とさないでね。

KV　騒がしい奴だ。ちょっとここに寝かせよう。いないいないばあ――もういいよ、こっちだよ。（赤ん坊を地面に寝かせ、サーベルでお腹を刺す）

LK　ひどい、何をなさるの？　坊や――（赤ん坊を抱き上げる）

KV　大げさに泣く子ですな。

LK　そんなことなさらないで。やわな赤ちゃんなのよ。ちょっとでもサーベルでお腹をつつかれたら、泣きわめくわ。ああ、眠った。

KV　蝿が鼻の上にとまってる。（帽子で赤ん坊をたたく）

LK　何を考えてるんですの？　帽子でこの子の顔をたたくなんて。

KV　僕がきょうかぶってたのが鉄兜でなくて良かったですよ。

LK　すごい子守ですのね。お願いしたのがまちがいでした。よくわかりました。

KV（彼女の胸に手をやる）　ほこりだらけですよ、払わなきゃ。

LK　厚かましいのね。そういうのいやだわ――なれなれしすぎるわよね、坊や、お前が一番よく知ってるわ。あ、また笑うようになった――かわいい坊やだわ。

KV　それに若い。

LK　そして赤いほっぺを持っている。元気になったのよね。でも一月前の

様子ったら、見せてあげたかったわ。

KV　その頃は僕は時間がなかった。

LK　ひどい様子だったのよ。あなたには想像がつかないわ。

KV　どうしたんです？

LK　ひどく具合が悪かったの。最初の歯が出てきて。

KV　うちの奥様は二週間前に出しましたよ。

LK　そんなに遅く？　ああ、やっと最初のお子が生まれたってことね。

KV　三番目です。僕が取り上げました。

LK　それはまったく別のことですわ――でも、坊やが昼も夜もずっと泣き通しだったら、どう思います？

KV　なぜですか？

LK　歯のせいで。

KV　歯が生えるのが怖かったのかな？

LK　いいえ、痛かったんです。ひどい熱も出て。

KV　それでどうしました？

LK　私もかわいそうになったわ。お医者へも連れて行かなければなりませんでした。おかゆも食べられなかったから。

KV　ものが噛めたならばね。

LK　エンバク重湯しかあげちゃいけなかったんです。

KV　それ、僕の白馬も好きですよ。重湯じゃなくて、エンバクですが。

LK　そのうえ、ひきつけも起こしてね。そんなときは真っ青になって手足をばたつかせるのよ。

KV　僕の馬も同じです。ちょっと前にはげになってしまいましてね、一週間前は尻の辺りはつるっぱげでした。

LK　この子は一月前でした。

KV　だいたいの子供はもっと早く生えるでしょう。あの時はそばに近づけなくてね――奴はうまやに入ってました――そうする必要があったもんで、奴は中に入ってました。そして人が触ろうとすると蹴とばすんです。（乳母車を蹴ってひっくり返す）

LK　何てことするんですか、坊や――おちびちゃん――どこかしら――泣

かないのよ、何でもしたげるから――痛いの？――おちびちゃん――何か言って。この子死んだとお思い？

KV　年とりゃ、死ぬでしょうよ。

LK　ああ、びっくりしたわ。奥様の耳に入ったら、私、家に帰れない。すぐに布団の中に入れなくちゃ。（乳母車を起こそうとするが、持ち上がらない。KVは手を貸さずに眺めている）ちょっと手伝って下さいな。（赤ん坊を乳母車の中に寝かす。KVは「手伝う」――サーベルで編みかけのものをくちゃくちゃにし、毛糸を切る。サーベルを乳母車の中に突き刺す、ひじ掛けに切りつけ、干し草マットをむしり取る）何てこと！　何てひどい人でしょう。気狂いみたいな真似をして。そんなことするもんじゃないわ。こういう赤ちゃんには思いやりが必要なのよ。

KV（乳母車のわきを忍び足で通る）　災難でしたね。

LK　ええ――もうそろそろ帰ります。

KV　僕も大急ぎでずらかるとしよう。

LK　あなたはよろしいですわね――こんな気持ちの良いお天気の中、ローゼナオ亭へと行けばいいんですもの。

KV　ええ――道がわかるといいんですが。それでは、さようなら。

LK　残念だわ、もう行ってしまうなんて――やっと私たち愉快になってきたところなのに。

KV　まったく。

LK　それでは、ごきげんよう。楽しんで下さいね――花火がドーンと上がったら、私を思い出して下さいな。

KV　それはもう。

LK　誰かとお会いになるの？

KV　いいえ――残念ながら――せいぜいが中隊の同僚です。で、そいつらはみんな女の子を連れてるんだ。

LK　それであなたはお一人なの？

KV　ええ、そうです。

LK　もし、ちょっと話し相手が必要ならば……あのう、私、とっても花火に行きたいの、一度も見たことないんですもの。

KV　そうですか……

LK　もちろん、あなた次第ですけど。無理にとは言いません。

KV　僕もです。

LK　ごいっしょしたいですわ。

KV　僕もです。いっしょに行きましょう。

LK　本当？　でもできないわ、赤ん坊がいるんですもの。

KV　そのへんに置いとけばいいでしょう。

LK　何をおっしゃるの。いえいえ、今、連れて帰ります。あなたはこのベンチで待ってて下さい。

KV　たくさんだ、僕にはわかってる。置いてきぼりにするんだろう。何度もこんな目に合ってるんだ。

LK　いいえ、置いてきぼりになんかしません。十分したら戻ってきます。約束するわ。

KV　信じられない、いっしょに行く方がいい。

LK　兵隊の格好で乳母車といっしょに歩く訳にいかないわ。恥ずかしいでしょう？

KV　ここで十分待ってるよりは、恥ずかしい方がいい。

LK　なら、いっしょに行きましょう。

KV　君のご主人はどこに住んでるの？

LK　すぐそこのルートヴィヒ通り。

KV　ルートヴィヒ通り？　それはいい。

LK　どうして？

KV　友人の一人がルートヴィヒっていうんです。

LK　それじゃあ、いっしょに行って、下で二、三分待ってらしてね。でも玄関のまん前にいてはだめよ、誰かに見られるかもしれないわ。だから向いの角とかでね。

KV　了解――抜かりはしない。

LK　それじゃ、私が下りてきたら、すぐにいっしょにテレージエン街を行きましょう。そしたらすぐにシュライスハイマー通りに出るわ。

KV　ちょっと回り道をしてもいいね、英国庭園の中を通って。そのうちに

はそろそろ暗くなるだろう。花火には十分、間に合う。（彼女の腰に腕を回し、二人は退場する）

第二幕

（ビヤガーデン「ローゼナオ亭」の中。上手側の背景は時代がかった食堂。舞台の奥行き全体に荒削りのテーブルと背もたれのない椅子が配置されている。花火の玉の入った大きな木箱もよく見える。前景には白や赤の飾りろうそくをつけたマロニエの枝。舞台上、縦横に針金が張られ、それにいくつかの提灯が下がっている。さらにいくつもの提灯が芝居の開始時にウェイトレスと店の下男によってつり下げられる。
客は一九一四年以前の軍服を着た兵士たち。白い剣帯、弧を描いているサーベル、ひさしのない帽子、房つき肩章、色付きの襟を着けている。彼らは、ところどころスリットの入った長いタイトスカートと、同様にアール・ヌーボー調の巨大なダチョウの羽飾りのついた帽子を着けた娘たちを連れている。
幕が開くと、店の亭主とウェイトレスが舞台上にいる）

亭主　ほらほら、急いで提灯をつるせ。青いの、赤いの、緑の――君たちにはセンスがないのかね？　イタリアの夜――これだけ聞いたって、ただむやみにつり下げればいいってものじゃないくらい、わかりそうなものだがな。

行商人（登場する）　葉巻、紙巻たばこ、ヴァージニア葉巻、ライター、葉巻、紙巻、いかがですか？（客のいないテーブル全部をまわり、一本調子に繰り返して、退場する）

亭主　樽の口を切れ！　じきに四時だ。ろうそくは入れてあるかね？　テーブルを拭いといた方がいいぞ。（ビヤ樽の口が開く音が聞こえる）

兵士（娘を連れている）　おねえさん、大ジョッキ！（持参のおつまみを食べる）

ウェイトレス　はい、ただ今。

亭主　いらっしゃいませ。きょうは花火を見ていかれるんでしょう？　あそこにいるのが花火師さんなんですよ。ベンガル花火の準備をしてるところなんです――きょうはうまい具合に天気もいいし。

兵士　でも続かないよ、きょうは天気が崩れるね。

亭主　悪くはなりませんですよ――きょうは晴天です。

兵士　でも、これから雨になるね。俺にはわかってるんだ。なぜって、きょう、うちの主人の犬を散歩に連れ出したら、犬が草を食ったのさ。犬が草を食うのは、夜にかけて雨が降る確かなしるしだよ。

亭主　悪くなりませんですよ。もし雨になったら大打撃ですわ。花火に三百マルクもかけたんですから。それなら、次の日曜にやることにしよう。ちょっと、花火師さん、どう思います？　今、こちらの兵隊さんがね、きょうはおそらく天気は持つまいって、おっしゃるんだ。

花火師　よして下さいよ――きょう、こんな青く澄みきった空をしてるのに雨になるはずないでしょう。どうしてそんな馬鹿らしいことを言い出すんですか。

亭主　こちらの兵隊さんにはご主人がおられるんだが、そのご主人がきょう草を食った――いや――犬がご主人を食った――いや――兵隊さんが犬を食った――いや――犬を散歩させたら、犬が草を食った。そして、犬が草を食ったら、夜には雨が降るのだそうだ。

花火師　信じられませんな。きょう雨が降ることは絶対にないと私は思いますね。――そうは言っても、犬が草を食うときっと雨が降るとは何度も聞いたことがありますよ。

亭主　そう、聞いたことがありますか。

花火師　ぎりぎりになって雷雨が来たとしたら、そりゃあ不愉快きわまりませんわな――そうですね、一つ相談ですが、花火は次の日曜に延ばしましょうか――ほとんど準備は終わったところだけど、また全部片付けてもいいですよ。

亭主　片付ける……

花火師　全部しまいますよ。

亭主　しまう……

花火師　この木箱を大事に保管して下さい。

亭主　大事に……

花火師　花火は次の日曜日にしましょう。

亭主　しましょう……

花火師　私はあなたに指図するつもりはないんです。でも、何もかもが雨で台無しになったら、実に残念なことですよ。お宅のきれいな風船もぬれてしまう――全部しまいましょう。箱を大事に保管して下さい。

亭主　それじゃ、台所に置きますわ。

花火師　めっそうもない、台所だなんてとんでもない。かまどのそばなんて。全部、花火の玉なんですよ――木箱は氷冷蔵庫の下に置くのが一番いいでしょう。

亭主　いや、いや、ロケット花火はソーセージにそっくりです。うちのばあさん、あの馬鹿が勘ちがいしてなべに入れて、ドーンです。

花火師　まさか、奥さんはそんなに間抜けじゃないでしょう。

亭主　ヴァリー、風船を下ろしてくれ。天気が心配だから、花火は次の日曜にする。（全部はずされ箱にしまわれる）

花火師　喜んで詰めますよ。この作業が好きだって訳ではないけれど、次の日曜は絶対晴れるから。

（亭主はその木箱のそばをうろうろする）

花火師　火のついた葉巻を持ってこの箱のそばに来ないで下さい。（兵士二が腰を下ろし、ビールを注文する）

亭主　いらっしゃいませ。きょうはすばらしい花火をやるところだったんですがね、夜にね、でも残念ながらよしにしました。天気が持ちそうもないのだそうで。

兵士二　誰がそんなこと言ったんだい？

亭主　あちらの方が――犬が草を食ったから、今晩きっと雨になるとおっしゃるんです。

兵士二　馬鹿らしい――きょうは持ちますよ。だってね、うちではアマガエルを飼ってるんだけど、そいつが一週間前からはしごのてっぺんにいるんだ。これは晴天が続く確かなしるしですよ。

亭主　なるほど。そうよく言いますね。何てこった。

花火師　それじゃ、ご亭主、こちらは片付きました――次の日曜にまた来ます――たぶんきょうと同じ頃に。その時、この花火を打ち上げましょう。――さようなら。（行こうとする）

亭主　あのあの――花火師さん、ちょっと待ってもらえますか？

花火師　もちろん。言い忘れたことでもあるんですか？　何かまだご希望でも？

亭主　こちらの兵隊さんがね、今、今晩まで良い天気は続くっておっしゃったんだ。

花火師　何てこった。

亭主　こちらさんはアマガエルを飼ってるのだそうだ。そのカエルがガラス箱の中で、はしごのてっぺんに座っている。そしてこちらが言うのには、それは晴天が続く確かなしるしなんだって。

花火師　そうコロコロ意見を変えないで下さいよ、ご亭主。

亭主　そこがわしの悪いところなんだ。

花火師　同じ日に犬が草を食い、そしてアマガエルがはしごのてっぺんに座るなんてあり得ないことのように思いますがね。

亭主　そうだな――奇妙だな。

花火師　天気がどうなるか、どんな人間も予言はできませんよ。

亭主　どんな人間にもできないから、こういう動物の助けを借りるのじゃないか。

花火師　アマガエルがもっとも確実な天気予報官だとは、私も聞いたことがあります――学校でそう習いますよね。私としては、アマガエルが正しいと、ほとんど信じますね。というのも一つお聞きしたいんですが、さっきの犬はどうして草を食ったんでしょう？

亭主　知らんね。

花火師　単純なことですよ――腹が減ってたんだ。その兵隊さんが犬にソーセージをやっていたら、草なんか食わなかったでしょう。

亭主　なるほど――そうか――もしその犬がソーセージを食っていたら、天気も悪くならないんだ。

花火師　ねえ、やっぱりきょう花火をやりましょう。箱からまた出しますから、そちらも提灯をまたぶら下げて下さい。

亭主　ヴァリー――ボーイ――提灯をまたつるすんだ。花火はきょうやるぞ。

（二人は提灯をまたつるす）

花火師　きょうやった方がずっといいですよ。次の日曜の天気がどうなるかなんてわからないし。きょうよりももっと雨の可能性が高いかもしれない。

亭主　きょうは降るかな？

花火師　わかりませんね――でも火のついた葉巻を持ってこっちに来ないで下さいよ。（また箱から全部出す）

兵士三（登場する）　小ジョッキ三杯ときれいな皿を一枚頼む。（持参した大根を薄切りにする）

亭主　えーと、きょうは花火大会にいらしたんですか？

兵士三　きょう、花火大会があるの？　何時に？

亭主　暗くなったらです。日があるうちは見えませんからね――ほら、今、花火師が準備してるところなんですよ――ふつうの花火とちがうんです。豪華花火なんでございますよ。ロケット花火やら、唾吐き悪魔花火やら。ヒューと打ち上がって行くときの様子といったら……！

兵士三　全部びしょぬれになるよ。今晩は雨が降るんだ。賭けてもいい。

亭主　悪くなりませんですよ。こんな晴天ですもの。

兵士三　でも今晩は降るよ。なぜって、今朝、俺が馬を洗ってたら、蝿がうまやの窓でブンブンいってたんだ。で、蝿がうまやの窓でブンブンいうってのは、晩に雨が降る確かなしるしさ。

亭主　もう訳がわからなくなった。（独り言を言いながらその場所を離れる）犬が草を食った、アマガエルが棒のてっぺんに座ってる、そして蝿はブンブンいっている、いったいどうなってるんだ。花火師さんよ、ちょっとこっちへ来ておくれ。

花火師　どうしたんだね、ご亭主。

亭主　今、こちらの重騎兵の方がね、蝿が窓でブンブンいってると、晩にはきっと雨が降るって言うんだよ。

花火師　そりゃ、あんまりですよ。もうすっかり準備できるところなんですよ。また影響されたんですな。あなたってはっきりしない人だ。――馬鹿には言わせときなさいよ。

兵士三　馬鹿とは何だ――そっちこそ馬鹿だろう……

花火師　まあ、落ち着いて下さい――あなたのことじゃありませんから。私

は、ご亭主、あんたのことを言ったんだ。

亭主　わしのことだって？

花火師　当然ですよ。だって自分がどうしたいのか、いつまでもわからないんだから。三匹や四匹の蝿が窓にいたからって……

亭主　三匹や四匹――どのくらいいたのですか？

兵士三　大群だ、何百匹とだ。

亭主　ほら――何百匹の蝿は、たった一匹のとんまなアマガエルより頼りになりますよ。

花火師　ええ……私だってそう言われるのを聞いたことありますよ。――ギリギリになって全部びしょぬれになったら、もちろん不愉快きわまりませんな。あなたに指図するつもりは毛頭ないけれど――でもあなたが心配ならば、花火は延期した方がいいでしょう。考えてもみなさいよ、ギリギリになって雷雨でもきたら。お客は帰っちゃうし、何もかもぬれてしまうし……

亭主　ビールは……

花火師　ビールもぬれるでしょう。

亭主　いや、ビールは残ります。

花火師　それはまあそう悪くはないかもしれない。残ったビールは自分で飲んでしまえばいいのだから。でも私は花火を食べる訳にはいきません。また、しまいましょう。

亭主　ヴァリー――ボーイ――花火はきょうはやらない。無理はしないことにした。また全部片付けておくれ――わしもちょっと手伝おう。

花火師　また葉巻を持ってそこにいるんですね、何度言えばわかるんです？

亭主（葉巻を落とす）　あれ、花火師さん、火のついた葉巻がこの木箱の中に落ちてしまった。

花火師　ここにだって――何てこった！（箱のふたを閉める。かなりの爆発音が聞こえる。亭主は震えながら、テーブルによじ登る）

花火師　いやはやひどいことだ！　まさに無類の軽率さだよ――私は三度も注意したんだ。

亭主　そして爆発したのは一度だけ。

花火師　これでも運が良かった方だ。木箱ごと飛んでいくことだってあり得

た――さあ、自分がやらかしたことをよくご覧なさい。でも、もうこっちに来ないで下さいよ。もうめちゃくちゃだ。

兵士四（登場する）　ああ、きょうは良いお天気だね。日曜だから本当に嬉しいよ。ここ、いいかい？（座る）

亭主　いらっしゃいませ。

花火師　待て。こっちへ来るんだ。また天気の話をするんだろう。他に話題はないのかね、さもないとまた同じことになるぞ。（亭主を引っ張る）

兵士四　ああ、きょうは良いお天気だね、本当に嬉しいね――半月は晴天が続くだろうな――外出日がこんな良い天気というのは嬉しいよな。日曜日がいつもこんなだといいんだけど。ツバメは空高く飛んでさえずってるし――煙はまっすぐに立ち昇っている――こんな日は雨が降るはずがない、晴れが続くんだ。

亭主（じっと聞いており、それから大声で呼びかける）　花火師さん……

花火師　わかってますよ、わかってますよ。提灯つるせ、花火を準備、でしょ。もう気が変になりますよ。もううんざりだ、花火を用意かと思えば花火をしまえ、なんて。もう変えませんからね。これが最後ですよ。今度、準備したら、もう絶対変えませんからね。

亭主　もう変えんよ――わしも男だ！　花火はきょうどんなことがあろうと決行する。

花火師　もう信用してませんよ。誰かがまた、雨だ、と言ったら、どうせまた気が変わるんだから。

亭主　何だって？――誰かがまた来て、「雨」なんて言ってみろ、肉たたきで牛みたいに殴ってやる……（肉たたきでテーブルをたたく。ＫＶがＬＫと入って来る）

兵士四　こんにちは、お嬢さん。

ＬＫ　こんにちは。

ＫＶ　よう、同僚！（二人は兵士四のそばに座る）

ウェイトレス　何でしょう？

ＫＶ　日曜です。

ウェイトレス　いえ、何にいたしましょう――大ジョッキか中ジョッキか？

ＬＫ　どっちがいい？
ＬＫ　大か中か、どちらでもいいわ。
ＫＶ　どちらでもいい。
ウェイトレス　はあ……どちらをお持ちしましょう。
ＫＶ　中ジョッキ二杯を大ジョッキに入れて持ってきてくれ。
ウェイトレス　それでは大ですね――では大をお持ちします。
ＫＶ　うん。
ＬＫ　いいえ――多いわ。私、ビール、好きじゃないのよ――私は一口でいいわ。
ＫＶ　それじゃあ、大と一口を頼む。（ウェイトレス退場。ＫＶはブレーツェル〔訳注　８の字形の塩味ビスケット〕を二つに割る）このブレーツェルを焼いたパン屋はもう生きてないんだ。
ウェイトレス（大ジョッキと中ジョッキを一杯ずつ運んでくる）　どうぞ。
ＬＫ　こんなに持ってきたわ。こんなにお金を使う必要はなかったのに。
ＫＶ　君のためには出費だなんて思わないよ、さあ飲もう。
ＬＫ　ありがとう。（中ジョッキを飲み干す）
ＫＶ（ジョッキをウェイトレスに渡す）　もう一杯頼む――他に人が来ないうちに飲もう。
ＬＫ　ええ――ありがとう。私、のどが乾いてきたわ。
ＫＶ　そうだと思った。（ウェイトレス、ビールを運んでくる）この次は、ふたつきのジョッキで持ってきてくれないか。
ウェイトレス　どうしてふたつきなんですか？
ＫＶ　ごみが入るからさ。
ウェイトレス　「ローゼナオ亭」にはふたつきはありません。
ＫＶ　でも、ごみはある。
ＬＫ　私はふたつきはいらないわ。私はふたなしのグラスの方がずっと好き。ふたをわざわざ開ける手間がないから、早く飲めるもの。
ＫＶ　まあな。
ＬＫ　そうよ……洗うのだって、ふたつきのはスギナ〔訳注　むかし錫器を磨くのに用いられた〕で洗わなければならない。十分は磨かないときれいにな

らないわ。

ＫＶ　君が洗う必要はないんだよ。

ＬＫ　ええ。――あなたもよ。

ＫＶ　仕事が嫌いなのは怠け者さ。こう言うだろ。学校で習ったろう。雨ニモマケズ、風ニモマケズって。

亭主　雨だって？――すぐ降らしてやるぞ。（肉たたきで頭をたたく――騒ぎになる。全員、立ち上がり、亭主を押さえ、互いに口汚く罵る）

兵士四　いきなり肉たたきで殴ることはないだろう！

亭主　あんたを殴っちゃいないだろ、だから黙れ。どんなにわしが神経を逆なでされたかちっともわからないんだ。（ＫＶに）お隣の方、お許し下さい、自分でも訳がわからないんです。肉たたきでたたいたといってお気を悪くなさらないで下さい。

ＫＶ　何をしたんだって？

亭主　肉たたきで殴ったんです。

ＫＶ　誰を？

亭主　あなた様を。

ＫＶ　いつ？　きょう？

亭主　つい、さっき。

ＫＶ　俺を？

亭主　ええ、あなたを――それともわしは自分を殴ったのだろうか？

ＬＫ　あなた、どんな頭を持ってらっしゃるの？　何も感じなかったの？

ＫＶ　ええ―帽子をかぶってたから。

亭主　今度こんな機会には脱いでなければいけませんよ。さもないと永遠に何にも感じない。それから馬鹿なおしゃべりをして雨だなんて言わないで下さい。きょうは花火をやるから良い天気でないと困るんです。

ＬＫ　ねえ、花火はいつやるんですか？

亭主　まだです。暗くなってからです。

ＬＫ　まだ当分暗くならないわ。

亭主　だからまだ打ち上げません。

ＫＶ　でも、もし、きょうは暗くならなかったら？

亭主　暗くなろうとなるまいと、花火は絶対に打ち上げます。

ＫＶ　それなら今、上げてもいいだろう。まだ暗くないがね。

亭主　今はまだ明るい。でも絶対に暗くなりますよ。

ＬＫ　でも、もし、きょうに限って暗くならなかったら、どうします？

亭主　馬鹿なことはおっしゃらないで下さい。毎日、夜には暗くなるものです。

ＫＶ　もし毎日暗くなるのなら、毎日、花火を打ち上げられるな。

亭主　それはできますがね、でも毎日打ち上げたら花火は、毎日のお定まり事になっちまう――それじゃ意味ないですよ。

ＫＶ　それなら、毎日暗くなるのも意味ないだろう。

亭主　意味はありますよ。もし、決してもう暗くならないとしたら、花火を打ち上げられませんからな。

ＫＶ　どうしてだね、為せば成るって言うだろう？

亭主　もちろん、それは……もう、何と言ったらいいか……

ＬＫ　暗くなっても、あなたが花火に点火しなかったら、見えませんの？

亭主　暗がりでものが見えないのはわかりきったことでしょう。

ＫＶ　花火もかね？

亭主　いや、花火だけは暗い方がよく見えます。

ＬＫ　火をつけなくてもですの？

亭主　ああ、ああ、頭が変になりそうだ――もう、おとなしく暗くなるまでお待ち下さいよ。

ＫＶ　でも、花火が始まるのを明日の朝まで待ってはおれんよ。

亭主　明日の朝まで？　それは遅すぎますよ、その時分にはまた明るくなっている。

ＬＫ　ええ、でも、もし……

亭主　もう困らせないでくれ――おととい来てくれ

ＫＶ　そりゃいい考えだ。おととの方が花火はずっとよく見えたろう。

ＬＫ　もう構うのはおよしなさいよ――この人、うんざりしているわ。

兵士四　さあ、音楽だ。花火が始まるまで歌を歌おう。

（ウェイトレスがアコーデオンを持ってくる――ＫＶが弾く）

全員（歌う）
朝の三時半に
ラッパが響く、
甲騎兵、起床、
うまやに下りて、
馬を洗え。
僕はこれが
大好きだ。

日曜日には
ローゼナオへと散歩する、
そこは楽しいところ、
時には大騒ぎ。
ぶん殴れ、
ぶん殴れ、
僕がこれが
大好きだ。

（歌っている間に夕闇が訪れる）

ＫＶ　花火の方はどうなってるのかな？

花火師　お客様方、もう始められますよ――準備はできております。（全員、後ろの垣根のところへ行く。ＫＶとＬＫは舞台鼻に出てくる）

ＬＫ　もうすぐシューシュー始まるわね、あの後ろで。

亭主　お二人さんはどうなさったんです、どうしてそんなところに立っているんです？

ＫＶ　花火を見ようと思ってね。

亭主　それならあの後ろです。他の方たちが立ってるのが見えませんか？

ＫＶ　なるほど。（すぐに二人とも後ろへ行く）

ＬＫ　もう始まってますの？

全員　いえ、待ってるところです。

花火師　ちょっと、ご亭主、打ち上げられないんです。始められないんです。

マッチがないんです。

亭主　何てこった。マッチを持ってないのか？　こりゃ、あきれたね、実に馬鹿らしい、煙突掃除人が煙突を持ってないのと同じじゃないか。

花火師　こういうこともありますよ。

亭主　こんなことはあってはならん、あんたはプロの花火師だろう。――どなたか火をお持ちじゃないですか？

ＫＶ　台所になら火はいっぱいあるだろう。台所で打ち上げろよ。

花火師　台所では花火は打ち上げられないんです。

亭主　くだらん話はやめるんだ。こいつにマッチをやってくれませんか。

兵士三　ほら。（花火師は飛び出していく）

全員　いったいいつになったら始まるんだ？――いつ打ち上げるんだ？

花火師（再び舞台に走って出てくる。人々は問いかける。彼は人々を押し分けて進む）　ご亭主、申し訳ない、でも花火はまだ打ち上げられません。

亭主　どうしてだ？　今度は何なんだ？

花火師　まだ明るすぎるんです――

亭主　わしの気を変にさせる気だな。天気はいいし、マッチはある、それなのに、突然、まだ明るすぎるだなんて――どういうつもりなんだ。

全員（笑い、口々に罵る）　ペテンだ。こんなつまらない花火。老いぼれのぐずぐず屋……（全員、再びテーブルに着く）

花火師　そのようなことはおっしゃらないでいただきたい。私は専門家としていつ花火を打ち上げるべきか承知しております。今はまだ明るすぎます。真っ暗い闇が必要なのです。

ＫＶ　地下ホールで打ち上げろよ――あそこは暗いぞ。

花火師　ホールだなんて――馬鹿らしい。ホールで花火をご覧になったことがありますか？

ＫＶ　もちろん。アウグスティーナー・ホールじゃ、よく花火をやってるよ。

花火師　ええ、アウグスティーナー・ホールではね。でもアウグスティーナー・ホールの地下ホールでじゃない。とにかく、漆黒の真っ暗な闇が必要なのです。

ＫＶ　もうほとんど暗いよ。（ビールを飲む）

花火師　こんなのじゃだめなんです。私は花火を「ほとんど」打ち上げる訳にはいかない、完全に打ち上げなければならないのです。

ＬＫ　どのくらい暗いのか計るバロメーターが必要だわね。

（ＫＶはビールを吹き出して笑う）

ＬＫ　私がちょっとものを言ったからってそんなに大笑いしなくてもいいじゃない。

ＫＶ　馬鹿――君はサーモメーターのことを言いたかったんだろ。

ＬＫ　いっそ、キロメーターって言えばいいでしょ。

亭主　それとも、阿呆さ加減を計るマノメーターか。

花火師　どれも役に立ちません。完璧に真っ暗な闇が必要なんです。

亭主　わかったよ、真っ暗闇だね。

ＫＶ　枕だって？

ＬＫ　真っ暗と言ったのよ。暗闇のこと。

（急に暗くなる）

花火師　さあ、始めましょう。

ＬＫ　暗闇の中で花火は輝くのね！

（背後の庭の暗がりの中でアベックたちがキスをする音が聞こえる――続いて打ち上げ音、そして数秒間、明るくなる）

亭主（キスをしているアベックたちを見て、叫ぶ）　火遊びかね？

（今や、花火は最高潮となる。輪転花火、クリスマスツリーの飾り玉、舞台のスポットライトが時々、きらりと光る。赤と緑のベンガル・マッチ、薫香ロウソクが匂う。しきりにドンパチ聞こえる。ローゼナオ亭ビヤガーデンの客は全員、花火が上がる度に「ああ」とか「おお」とか「ほら、見て」と感嘆の声を上げる。最後に、全員、拍手する。「ブラヴォー」という声が聞こえる。そして全員、退場する一方で、提灯の明りがともり、ビヤガーデンの照明が点けられる）

ＫＶとＬＫ（消えていく花火を見ている）　良い晩だった、きれいだった。

亭主　ちょっと！　あなた方お二人はどうなさったのです？　何をまだ待っているのです？

ＫＶ　いつ花火は終わるんだい？

主　これはこれは。もう終わりました。もう見るものはございません。
ＬＫ　それにしてもきれいな花火だったわ。
ＫＶ　音もすごかった。
ＬＫ　それに、いやな臭いの花火もあったわ。
ＫＶ　破裂するものすべて香り良し、とは限らない。
主　おやすみなさい。――お気をつけて。
ＫＶ　帰り道がわかればいいけど、こんなに暗いんだもの。
主　提灯をどうぞ。――プレゼントいたします。（二人は提灯を奪い合って、破いてしまう）
ＬＫ　破けてしまった――残念だわ。
（ＫＶは提灯をポケットに突っ込もうとする）
ＬＫ　やけどするわよ。
主　馬鹿につける薬はない――おやすみなさい。
ＬＫ　花火は次はいつやりますの？
主　次の日曜です。
ＫＶ　また来よう――日曜だね、今度の。
主　そうです。
ＫＶ　ふむ――でも、もし、次の日曜、雨だったら？
主　くそくらえ。